

5. 10. 31

佐倉市

教育センターだより

Vol.61

令和5年10月31日発行／佐倉市教育センター／TEL.043(486)2400 http://www.city.sakura.lg.jp/soshiki/13-6-0-0-0_6.html

子供たちの幸福と 自己実現のために

佐倉市教育センター所長 松原 和弘

“生徒指導”と聞くとどのような印象を持つでしょうか？
「生徒が先生に怒られること」を想起する方がいらっしゃるかもしれません。確かにドラマに出てくる生徒指導や生活指導の先生は「怖い」イメージの先生が多いですね。

学校や教職員向けに文部科学省が作成している『生徒指導提要（以下提要）』というものがあります。いわば、教職員にとって、指導の手引きともなる基本書になります。提要によると“生徒指導”は「社会の中で自分らしく生きることができる存在へと、自発的・主体的に成長や発達する過程を支える教育活動…」と定義されています。つまり“生徒指導”は、決して指導的（怒られる）ではなく、子供たちの成長や発達を見極め、支えていくことを主とした教育活動ということになります。

また提要には、“生徒指導”の目的が以下のように掲げられています。

《生徒指導の目的》

生徒指導は、児童生徒一人一人の個性の発見とよさや可能性の伸長と社会的資質・能力の発展を支えると同時に、自己の幸福追求と社会に受け入れられる自己実現を支えることを目的とする。

これを見ると、「幸福追求」、「自己実現を支える」等々…、子供たちの将来を見据えた言葉が並び、冒頭に示した「怖い」というイメージとはずいぶん印象が違うと思います。学校の先生方はこうした目的に資するため、日々子供たちと向き合っています。さらに提要には、子供を支えるために周りの大人たちがチーム(チーム学校)になることの重要性も示されています。私は、全ての子供の幸せな未来のために、関わる全ての大人たちがチームで子育てを行っていくことが“生徒指導”において重要であると認識しています。前回の教育センターだより(60号)に「子供たちのために周りの大人たちの力をつなぐ」と記させていただきました。佐倉市教育センターはまさに、チームで子供たちを支え、育てていくことを理想としています。

今の子供たちが大人になるころ、社会はどのように変化しているのでしょうか。グローバル化、デジタル化はさらに進んでいるのでしょうか。戦争のない世界になっているのでしょうか。将来子供たちが、多様な価値観の中で、誰もが生きがいと幸福を感じられるような素敵な社会の創り手となって輝く…。教育センターはそんな理想と期待を胸に、個の特性に応じた教育、成長や発達を促す支援を進め、現代の子供たちを輝く未来に送り出すお手伝いをしたいと考えています。子供たちの将来の幸福と自己実現のために…。

佐倉市の現状

令和5年度5月1日現在の佐倉市内の特別支援学級在籍児童・生徒数は、564人。11年前に比べると約3.4倍に増えており、全体の4.83パーセントを占めています。〈図1〉

また、ことばの教室を利用している児童数は、令和4年度末で192人。10年前と比べると約1.5倍に増えています。〈図2〉

図1 特別支援学級在籍児童生徒数の増加

年度	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R1	R2	R3	R4	R5
人数(人)	166	196	233	260	263	291	296	319	363	421	486	564

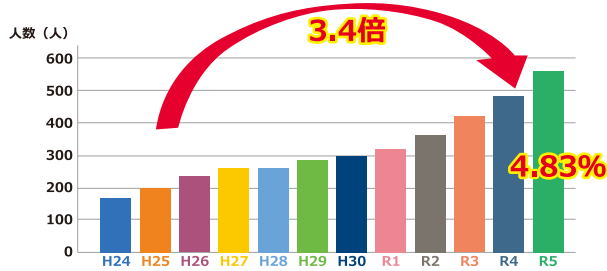
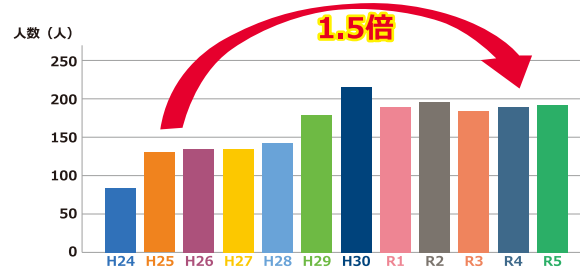


図2 言語通級指導教室に通う児童数の増加（年度末統計）

年度	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R1	R2	R3	R4	R5
人数(人)	85	129	138	140	146	182	215	191	198	186	189	192



特別な支援を必要としている児童生徒が増えている背景としては、世の中に発達障害について広く認知されたこと、保護者がきめ細やかな対応を求めて、特別支援学校や特別支援学級を選択するようになったことが考えられます。

そこで、必要となってくるのが、インクルーシブ教育システムです。インクルーシブ教育システムとは、障害のあるものと障害のないものが一緒に学ぶ仕組みです。ただ一緒にいるだけではなく、そこでの学びが保障されるように基礎的環境整備が整っていることが重要になります。

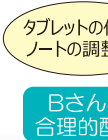
インクルーシブ教育システムの構築における重要な視点

- ①授業内容がわかる
- ②学習活動に参加している実感・違和感をもつ
- ③充実した時間を過ごしている
- ④生きる力を身に付けている

障がいのない子ども



Aさんの合理的配慮



Bさんの合理的配慮

障がいのある子ども

基礎的環境整備

佐倉市で行われている基礎的環境整備

<ことばの教室>

5校8学級で行われています。
構音障害や吃音などをもつ児童への指導の様子を紹介しました。通常の学級でもできる体操や吃音をもつ児童に対して、自分を理解することが大切であることなどを伝えることができました。

<きこえの教室>

2校で行われており、千葉聾学校の通級教室（サテライト教室）も1校行われています。
デジタル補聴支援システム（ロジャーセレクトやロジャーペン）を使ったやり取りやICTを活用した文字での支援方法を紹介しました。

<視聴覚教具の活用>

大型テレビの活用、言葉だけの指示ではなく、視覚情報で表す、はっきりとした学習のめあてがある、一日の流れがわかる掲示物、タイマーの活用などを確認の意味も込め、紹介させて頂きました。

<印旛特別支援学校との交流>

居住地校交流や特別支援学級と交流学級の交流の必要性について述べさせて頂きました。

<桜ヶ丘特別支援学校との連携>

自立活動について専門の方との連携をしている様子を紹介しました。



まとめ

今後、子どもたちが育ち、社会参加できるようになった時、障害のあるなしに関わらず、すべて分け隔てなく暮らししていくことのできる「共生社会」になっていることが、佐倉市におけるインクルーシブ教育システムの目指すところであり、私たち教員全員が意識して進めていくことであると思います。

この提案が、共生社会をつくる第一歩になることを願います。

社会的自立に向けた不登校支援について

「社会的自立に向けた不登校支援について」をテーマに、佐倉市の学校や関係機関での実践紹介を通して、不登校児童生徒の実態や、これからの不登校支援の方向性と大切にすべきことについて、報告をしました。

不登校支援でめざすもの～社会的自立とは～

社会的自立とは

将来、児童生徒が精神的にも経済的にも自立し、豊かな人生を送れること。

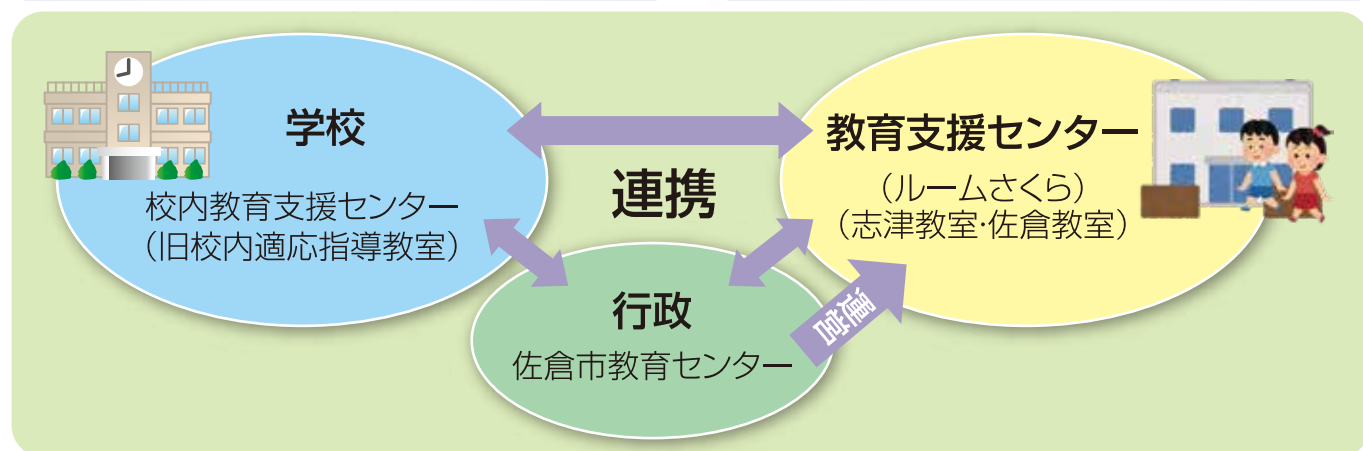
社会的自立に向けて必要なこと

- 自己決定する(自分の意思と判断)
- コミュニケーション能力、ソーシャルスキルを身につける
- 人に上手にSOSを出せる
- 自己肯定感を高める
- 主体的に社会に参画していく

佐倉市の不登校支援～教育センターと学校とルームさくらの連携～

西志津中学校のさくら学級(校内教育支援センター)は、「生徒が笑顔になれる場所にしたい」という合言葉のもと、オープンスペースと個室スペースを用意し、生徒がどう過ごすかを自分自身で決め、自分のペースで人と関われるような場づくりが行われていました。

ルームさくら(教育支援センター)は、市内に2か所あります。志津教室は大部屋があり、佐倉教室には3つの小部屋があります。それぞれの特色がありますが、子供たちが自分の居場所が見つけれられるよう、相談員が心に寄り添いながら支援しています。



まとめ 佐倉市教育センターがつなぐ大人の支援の輪



昨年度末、佐倉市には小中学生の3.67%にあたる445人の不登校児童生徒がいました。子供たちにはパワーをためることが必要な時期もあり、登校刺激が逆効果になってしまうこともあります。子供によって、状況、ペースは様々なので、学校復帰だけを目的とせず、社会的自立を目指すことが大切です。子供の状況や実態に合わせた学びの場や機会を提供し、子供たちに、社会で生きていくために必要な力を育てていくという目的を共有していくことが重要となります。

教育センターは、佐倉市の子供たちのために、周りの大人の力をつないでいく存在でありたいと思っています。今後ともよろしくお願いいたします。

授業改善にむけた実態把握の重要性

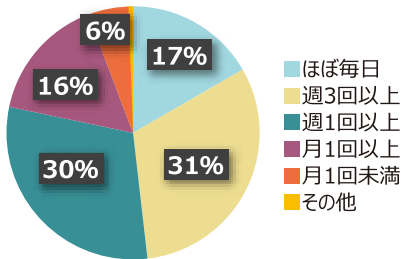
授業改善において、児童生徒のニーズや数値から課題を把握することが重要である考え、【授業改善にむけた実態把握の重要性】をテーマに、報告を行いました。

児童生徒のニーズとのずれ

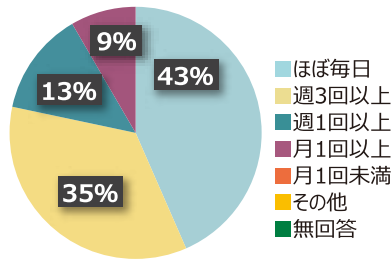
全国学テより

前学年までに受けた授業で、PC・タブレットなどのICT機器をどの程度使用しましたか。（インターネット検索など）

小学校 児童



小学校 教諭



タブレットをほぼ毎日使っているという児童が17%に対し、教諭は43%という数値になり、26%のずれがあります。

このことから、児童は、教師が思っているよりもICT機器を使っていないという思いがあることがわかります。

中学校でのデータでも同様の傾向が見られました。

学力の到達度調査だけでなく、質問紙にも注目することで、より具体的な実態把握ができます。

その際に、教諭と児童生徒の違いに着目すると、児童生徒のニーズがわかります。

SP表→誤答分析シートの活用を!

S-P表

授業改善の資料として

教科別報告書

佐倉市教育センターは、佐倉市学習状況調査をもとに学校ごとに教科別の報告書を作成します。平均の正答率や過去三年間の正答率の推移、各学年の傾向などが記載されています。

また報告書には、授業改善に向けてのアドバイスもあります。実態把握、授業改善について佐倉市教育センターも一緒に考えていきます。

令和5年度全国学力・学習状況調査 誤答分析シート

① 課題の見られた設問：誤答の解答類型別反応率が高い

誤答分析シート

正答

解答類型5（誤答）への反応率(%)

項目	本校	本県	全国
解答類型5（誤答）への反応率(%)	26.1	12.7	11.3

国立教育政策研究所では、調査問題や授業改善に向けた取り組み例などを解説資料、報告書にまとめています。学校の実情に応じた指導のあり方がわかります。



まとめ

- 1 児童・生徒理解が授業改善の糸口になります。質問紙にも注目しましょう。
 - 2 S-P表、誤答分析シートを使って学力の弱点を見つけましょう。
 - 3 国や佐倉市の報告書を活用し、個の課題や教科の課題を見つけましょう。
- ☆ 個人で行わずに、チーム学校で当事者意識をもって取り組むことが大切です。

センター報告会において、佐倉市内各学校のS-P表を配付しました。S線（青線）P線（赤線）の見方、各学校の学力の強み、弱みの見つけ方を伝えました。

学校の弱点がわかったら、誤答分析シートで、解答類型ごとに分析することが、授業改善の第一歩となります。